

下記2紙で NPO法人築地居留地研究会主催の「第11回外国人居留地研究会全国大会in築地」が取り上げられました。

————— 12月1日付け 東京都中央区・区報 矢田美英区長 —————

先般、「NPO法人築地居留地研究会」(水野雅生理事長)主催の第11回全国大会が聖路加国際大学で盛大に開かれました。

外国人居留地は江戸末期から明治にかけて長崎、神戸、横浜、函館、川口(大阪)、東京、新潟の7都市に造られ、江戸から明治へ日本が近代化していく上で大きな役割を果たしました。江戸時代は認められていなかった外国人の居住や貿易が外国人居留地では認められ、西洋文化があふれ、明治初期の風俗の創出とともに新文化に切り替える一大チャンスとなったのです。

現在の明石町界隈にあった築地居留地は聖路加国際大学や慶應義塾大学をはじめ、日本最古の女学校の一つである女子学院や立教女学院、雙葉学園など13もの学校が発祥しました。また、教会や外国の公使館が立ち並び、伝道や教育、医療の中心として時代をリードしていました。作曲家で有名な山田耕筰は少年時代が築地居留地で過ごしたことが、その後の音楽活動の源になったそうです。

今年も大変お世話になりました。ありがとうございました。よいお年をお迎えください。



こしにちは  
区長です  
やだよしひで  
矢田美英  
中央区長

————— 12月12日付け 朝日新聞夕刊 文芸・批評欄 —————

## 外国人居留地 日本の女子教育の夜明け

### 7地域の関係者が集い研究会

幕末から明治にかけて函館(北海道)・築地(東京都)・横浜・川口(大阪市)・神戸・長崎に設けられた外国人居留地。それに開港地の新潟を加えた7地域の関係者が集う「外国人居留地研究会全国大会」が先月、東京・明石町の聖路加国際大学で開かれた。

今回が11回目で、テーマは「居留地と女子教育」。報告で驚かされたのは、居留地内の女学校で行われていた授業の濃密さだ。例えば立教女学校(立教女学院)の場合、明治10(1877)年には会話、書き取り、文典、歴史、作文、裁縫、音楽などの講義がすべて英語で行われ、生徒たちも英語でノートをとっていた。

歴史もローマ帝国史が中心。英国の著述家S・スマイルズや、同じく哲学者のJ・S・ミルらの事績が頻繁に引用されていたという。こうした教育を受けた女子学生から、共立女学校(横浜共立学園)卒の岡見京(京子)のように米国で医学を学び、東京慈恵医院の婦人科主任になった人物も



立教学校(後の立教大学)校長だったJ・ガーディナーが描いたかつての築地居留地

出た。日本の女子教育の夜明けが、各地の居留地と、そこで学びの機会を設けていた宣教師らから始まったことは間違いない。

感銘を受けたのが、不平等条約改正までの40年余しか存続しなかった外国人居留地をテーマに、専門家や関係者らが11年も毎年、地道に集まり続けていることだ。今回は217人が参加。主催したNPO法人築地居留地研究会の大島房太郎事務局長は、グローバル化が進む現代に「西洋の豊かさを学び、取り込む場所だった居留地を研究する意味は大きい」と語る。今後、更なる光があたることを期待したい。

(編集委員・宮代栄一)